

世界とつながる京都工芸繊維 大学を目指して

—海外で感じた強みと課題—



分子化学系 足立 馨 助教
派遣先 プリティッシュコロンビア大学(カナダ)
2015年4月～2016年3月

電気電子工学系 高橋 和生 准教授
派遣先 オルレアン大学ポリテクオルレアン(フランス)
2015年4月～10月

繊維学系 山田 和志 助教
派遣先 シンガポール国立大学(シンガポール)
2015年5月～2016年3月

海外大学との懸け橋として

足立 今回は1回目の派遣事業だったわけですが、準備が大切でしたよね。10月の事業採択決定後に、自分で行き先を決めて、インビテーションレターまでもらうという。

山田 そうでした(笑)。私はシンガポール国立大学というのは決めていたのですけど。本学との協定校ですし、シンガポールにはうちの専攻を出た卒業生が何人か住んでいますから。ただ、両校の連携をより推進するという意味で、知り合いの先生のいない研究室を希望して、受け入れ先は、任命を受けてすぐ知り合いの先生に当たって紹介してもらいました。高橋先生は以前からオルレアン大学とのつながりをお持ちだったのですか？

高橋 はい、オルレアン大学とは共同研究をしていました。そのご縁もあったのですが、ちょうど本学と協定を結ぼうとしているときでしたので、両校の関係性をもっと深めたいという思いもありました。足立先生はどうしてバンクーバーへ？

足立 知り合いの先生からの紹介で。協定を結んでいない大学でしたのでツテを頼ったわけですが、全く知らないところに身を置いてみたいという気持ちが強かったですね。これから教育連携していける、何か小さくてもきっかけになれば、という思いもありました。今回の派遣はそういうことも目的でしたから。それと、英語を鍛えたいという気持ちもあって(笑)。

高橋 私はあえて英語圏でないところへ(笑)。英語は少しは

使えるので、またドイツの研究所にいたこともありましたが、言語を変えようかなと。NHKのフランス語講座で勉強しました。仕事は英語でできるのですが、現地の言葉は、仕事以外でその国のことに親しめますので必要だったと思います。この派遣事業は、いろいろな意味で、教員も新しいチャレンジをする機会になりますよね。もちろん、教育に還元できることが大前提なわけですが。そうしたこの事業の主旨を、受け入れ先の大学側が理解してくれていることはとても重要で、今回はそれができていたかな、と自分では満足いくものでした。

足立 これからも継続する事業ですし、お願いする側がきちんと主旨を理解し、先方に伝えておくことは本当に大事だと思います。

方向性を明確にするということ

山田 その意味では、私は研究室に配属され研究と一緒に行ったことも当然ですが、学生気分講義に出たのは良い経験になりました。日本とシンガポールの授業のしかたの違いを肌で感じましたし、今後の教育を考える上でおおいに参考になりました。

高橋 私も懇意にして下さった先生方の授業はほぼ出席しました。あとは1年生、2年生、卒業を前にした学生たちへのカリ

キュラムの違いなどを調べたり、留学生や派遣されて来る人たちへの受け入れ態勢ですよ、このことをずいぶん詳しく教えてもらいました。どう受け入れているのか、どのように処遇しているのか、一連の流れを確認しました。学生実験の補助をしたとき、フランスの学生さんより留学生のほうが多いのが印象的だったものですから。

足立 私の場合は、山田先生と同じで研究に携わりながら講義に出たり、各種のセミナーへ参加させてもらい、どういう教育、どういう活動がされているかを体験してきました。

高橋 お二人もそうだと思いますが、海外の大学に通ってみて改めて、日本の大学とはシステムもカリキュラムの組み方もまったく違うことを実感できますよね。そもそも思想が違う。一概にあちらは良い、とは思いませんでしたが、ただ、日本の大学がどういう思想を持ってどこへ向かおうとしているのか学生が分かりにくい、ということはあるように思います。

足立 思想が違うというのは興味深い視点ですね。

高橋 本当にそれを感じて。なんとなくカリキュラムを拡充するとか、授業の進め方を見直すということはあっても、海外の大学に比べて大学全体として何を指すのか、というのが学生が分かりにくい気がするんです。

山田 なるほど。他国では大学の個性は、ある意味国家主導ではっきりしていることも多いですよ。たとえば先生のおられ

たグランゼコールも、私のいたシンガポール国立大学もエリート養成するための教育機関です。そして留学生も母国のエリート候補生としてやって来る。

高橋 ええ。そういう方向を目指している、ということですね。グランゼコールでは教育内容はほとんどが実学です。学生には選択科目の余地が与えられておらず、ほぼすべてが必修科目。そしてその目指す方向がはっきりしていると、学生もそれをきちんと理解するものなんだ、ということが良く分かりました。“自分はここでこれを身に付けてこうしていくんだ”、という学生自身の方向性も確固たるものがあります。

足立 大学の在り方が学生のモチベーションにつながるということは確かにあると思います。日本のほうが良いと感じたことはありますか？

高橋 学生の自由度が高いことでしょうか。語弊があるかもしれませんが、何かを一方的に詰め込まれることはありませんので、いろいろ考える時間や機会がある。でもそれを生かし切れていないと思うんです。

山田 確かに。もったいないことです。

高橋 きっとそれは、学生がどこを向いたらいいか分かりにくいからではないでしょうか。だからこそ、基本的な方向性は明確にすることが大事かなと思います。いろいろな科目があって、そのひとつひとつには目的が掲げられているけれど、学生が魅力を感じるプログラムの必要性を感じました。

海外で感じた研究のスピードの早さ

山田 シンガポールは国家政策としてナノやバイオテクノロジーなど研究分野を絞り、その分野で世界一になるという目標があって、その最前線が国立大学なんです。それに惹かれて留学生が集まって来る、ということもありますね。それに大学内に、マサチューセッツ工科大やハーバード、ケンブリッジなどから研究室ごと移籍しています。日本の大学では考えられないですが、そこまで徹底しているんです。

高橋 日本では予算的にも難しいですが、大学の大きな魅力になりますね。国の研究機関も敷地内にあるのですか？

山田 はい、あります。その中の一番大きな施設がイムリといわれるもので、1つの研究室に何人かのポストドクターがいるほど研究者が大勢います。その教授が大学の各専攻の教授も兼ねています。

高橋 あ、それ、オルレアン大学も同じです。

山田 そうなんですか。そういう大学も多いですね。それで独特だなあと思ったのは、イムリの教授がポストドクターや、ドクター、マスターに教え、彼らが学生に教えるというトップダウン形式で、研究装置の操作なども、オペレーターもいますけれどもポストドクターが手取り足取り教え、研究のスピードがとても早いということです。

足立 先ほど高橋先生がおっしゃったプログラミングがうまくいっているひとつの例かもしれませんね。プリティッシュコロンビア大学も、カナダでトップクラスの大変優秀な大学です。やはりエリートを育てることに主眼が置かれているように感じました。そこでさらに2つに分かれて、研究室に入って研究をしたいという学生と、就職を目指す学生とでプログラムも分かります。研究室へ入るのは研究をしたい！という意欲が旺盛な学生ばかり。日本では誰もが研究室へ配属されるわけで、もちろんそれはそれでいいんですけども、カナダでは違う。そしてここでは山田先生のお話と同じように、先生からポストドクター、ポストドクターから学生へというトップダウンで、研究のスピードは確かに早いです。研究室の学生はサラリーももらっていますので、結果を出そうという意識も高いですね。



留学に対する意欲の差を実感

高橋 大学の在り方は学生の資質にも大きな影響を与えるような気がします。留学に関しても、海外の学生は自分の意志や目指すところに応じて、自分の行きたい大学の門戸を叩くのが一般的だと思いますが、日本ではお膳立てができていて、「行きませんか？」という声かけによって、留学を考えるという違いがあります。時に、果たして何を指して行きたいのか、周囲に影響されているだけではないのかな、と思うときもあります。留学希望者が増えているのは良いことですが……。留学に対する意識が海外の学生と差があるのは自然なことであり、少し残念な気もします。

足立 モヤモヤしている学生はいっぱいいると思うんです。行ってみたいけれどなかなか自分では決められない。そういう学生には声かけも有効かなとは思いますが、5年ほど前でしたか、うちの研究室に留学を強く希望する学生がいて、M1の時にアメリカへ留学しました。すると次の年から積極的に留学したいという学生が増えて、今では4人の配属のうち少なくとも半分は留学する研究室になりました。何かきっかけがあれば意識も変わってくるのではないかと思います。

山田 うちの研究室では、中国や韓国の大学と共同研究をしていますが、留学熱は高くないのが現状です。広い目を養うこと、自分や日本の立ち位置を知ることとはとても大事ですので、私の海外での経験が、海外にも目を向けてもらえるきっかけになれば、と思っています。

高橋 そういう機会を与えることも私たちの役割かもしれませんね。実は今回の派遣を契機に、オルレアン大学との交換留学も実現して大変良かったと思っています。学生が現地へ行ってこそ、その留学に対する思いの違いも感じ取ってくれるのではないかな、と期待したいです。

グローバル化推進に必要なことは

山田 シンガポールはアジアの大学ですから、日本を留学先に選んでもらえることは多いのですが、欧米では様子が違うでしょうね。

足立 カナダは隣にアメリカがありますから、日本を選んでもらうのはなかなか難しいです。それでも留学先に選んでもらうためには、何よりも国際的な研究成果を上げること。これなくして有効な手段はないと思います。本学は工芸繊維と名の付くように分野が絞られていますので、その分野で日本を代表するような成果を上げること。そして、その分野で世界のトップを目指せる面白さのあることもアピールになると思います。そのためには、電子論文をワンタッチで読めるという海外並みの環境を、できる限り整え競争力を高めるために最先端の研究を把握しておく必要があります。

高橋 最先端の研究を把握することは、それを研究者が学生に提供できるということでもありますからね。それと成果はもちろんですが、先ほど少し触れたように、欧米にはない魅力として学生の裁量が大きい、自由度が高いということがあって、これもやはりアピールできることだろうと思います。特に目に見える成果をあげたとき、プラスアルファの魅力にもなると思えますね。

山田 日本、京都という土地柄を活かした教育が充実しているのも本学の特長ですね。そういうことを受け入れてくれる人材を増やすのも本学の発展につながるのではないのでしょうか。

高橋 なるほど。ところでシンガポールでは日本を留学先へ選んでもらえることが多いということですが、学生さんが日本を見る目はどんな風ですか？

山田 シンガポール国立大学からうちへ来て卒業した学生に、何でうちだったのかと聞いてみたことがあります。「やはりアジアなら日本だ」と。素直に日本へ行ってみようという学生はまだ多いようです。その中で本学を選んでもらうポイントは知名度だと思います。共同研究をしているとか、関係のある大学の学生には知ってもらっていますが、もっと知名度を上げるには、研究成果・実績、共同研究のさらなる推進、あるいは国際会議での発表、海外の大学とコミュニケーションをとる機会を多く設けるといったことを通して、「京都にこういう学校がある」「こんな先生がいる」ということを、告知することが重要だと思います。そういうところで本学を知った学生さんが来たい！と言えればウェルカムという体制を整えておくことも必要でしょう。シンガポールでもアメリカやヨーロッパ志向は高まっていますし、外にどんどん出て、知ってもらえる努力は必要不可欠だと思います。

足立 同感です。ちょっと話がずれますが、その点、海外の学生はプレゼンテーションが本当に上手で、それが発信力につながっていると感ずることがあります。大学では実際、教壇の前に立って発表する授業がいくつか組まれていますし、もっと小さい頃からそういう教育を受けているはずで、発表する力は発信する力になり、それはグローバル化には欠かせない力になる。私も授業に取り入れていきたいと考えています。

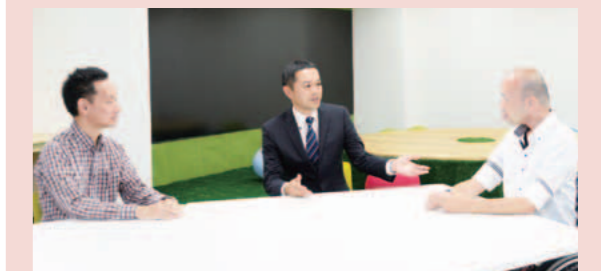


高橋 日本の学生さんは、発表する前に発表のしかたを覚えるという傾向がありますね。そういうスタイルもありだとは思いますが、本当は自分で考えたやり方、自分の言葉で伝えることが真の力になるはず。私は少々せっかちな性分ですが(笑)、学生の考えるという行為に対して、待つということをやっていると思っています。

山田 考えることが、先ほどから出ているさまざまな機会を、無駄にするのではなく活かすことにもなりますよね。

高橋 お二人と話をしてみても、改めて、グローバル化とはどういうことか、外から見てわかること、考えさせられることはとても多く、有意義な事業であると感じました。本学と本学の学生に還元する方法を、それぞれの立場でお互いに考えていきたいものですね。

海外で感じたことをどう活かすか？



足立 馨 助教

海外の学生に対して、「この分野では世界をリードしている」、という存在感を示せる大学に

高橋 和生 准教授

学生の自由度が高いということ。この魅力を生かすこともグローバル化につながるのでは

山田 和志 助教

海外での経験を還元し、学生の視点を広く外へと向けることも私たちの務め